「ふるさと」を失うということについて
—自伝的考察—

川瀬　健一

はじめに

　ペガーダ第十三号と十四号の春田さんの文章、「わが故郷はいずこに」とその補遺、さらに詩「故郷喪失」の感想を述べたい。春田さんとは、百合丘駅前の古書店をひらいておられた時に数年間通い、お互い先祖のことなどを調べているという共通点などもあり、お互いのことをいろいろ話しあった。春田さんの故郷のことは少し聞いていたので、大変興味深く読ませていただいた。

　春田さんは、懐かしい「ふるさと」の光景がほとんど失われてしまい、自分の意識の中に残っている光景がすでに現実には存在しないことの寂しさを述べられた。要するに「ふるさと」を失ったということなのでしょう。

　この「ふるさと」を失うという言葉が世間にあふれたのは、東日本大震災とその直後の福島第一原発事故であった。

　岩手県・宮城県・福島県・茨城県の各地で、数万の規模の人々が、津波や原発由来の放射能のために、今までに住み慣れた場所を離れて、遠い土地に避難せざるをえなくなった。そして被災地の復興は徐々に進んでいるとは言え、津波に流された町並みが元に戻るには数十年かかるだろうし、津波の塩害でやられた農地が元に戻るにも同じほどの時間がかかるだろう。さらに放射能に高度に汚染された地域が、暮らすのに問題ない程度に放射性物質が減るには、これもまた数十年から百年程度の時間が必要だ。こうしてこの大災害によって、多くの人々が住み慣れた場所を出ざるをえなくなった。

　この被災地の多くは、東京などの大都会とは異なり、生まれてから数十年、いやそれどころか先祖代々（短いところで

江戸時代から、中には鎌倉時代から家系が続いている人も多くいるようだ）数百年もの間、その地で暮らしてきた人々が多い地域だ。だから「生まれ育った地」としての「ふるさと」を、そして「家が成り立ったその大本の地」としての「ふるさと」を失った人が膨大な規模で生み出されたわけだ。この意味で春田さんのような例が、一度にたくさん生み出されたのが、東日本大震災とその直後の原発事故だったといえる。

　ただ残念ながら私には、春田さんや、この災害で「ふるさと」を失った人々の気持ちがよく理解できない。「失ったものを懐かしんでいないで、今いる新たな地での生活を大事にすればよいのに」とどうしても感じてしまう。

　何故なら私には、「ふるさと」と呼べる地がなく、その実感もないからだ。

　私の父は大手電機メーカーの幹部だったので、数年おきに転勤の連続。だから私は生まれた地にそのままとどまって成長し、竹馬の友や近所のおじさん・おばさん・おにいさん・おねえさんに囲まれて成長した思い出もない。そしてこれはさらに、父方と母方をたどってみても、先祖代々の地としての「ふるさと」はあるにしても、私自身はそこに住んだこともなければ、その「ふるさと」にしても、先祖のある人が住んでからの土地でしかなく、「家の成立」以来の地ではないからだ。

　そんな私から見ると、震災と原発事故で「ふるさと」を奪われた人たちは、失われた過去を懐かしみ嘆いてばかりいないで、深刻な災害を生み出した責任者たちの責任を追及して正当な補償を要求するとともに、今現に、生活している地とそこで出会った人たちを大事にして、そこに新たな「ふるさと」を作り上げることに専念することが大事なのではないかと、思う。

　なぜなら、この災害は天災ではないからだ。

　東日本大震災を引き起こした三陸沖の超巨大地震とこれに伴う大津波は、実は発生は間近ではないかと予想されていた。

　一九九〇年代から二〇〇〇年代の初めにかけて、宮城県の石巻平野から仙台平野、そして福島県沿岸の各地域の地層に残る過去の津波堆積物を調べた結果、この地域には過去に何度も海岸から数ｋｍにもおよぶ範囲まで到達する大津波が襲っていたことが確認されていた。そしてこの調査によって、八六九年にこの地域を襲った貞観地震・津波は、その震源域は宮城県沖から福島県沖にかけた地域で、幅一〇〇ｋｍ・長さ二〇〇ｋｍ程度の震源断層が一〇ｍ程度動いて起きた地震で、その規模はＭ８以上と、今まで地震学で考えられていた地震の規模をはるかに超える、想定される大地震がいくつも連動して起きる地震だということがわかった。そしてその結果として岩手県から福島県にまでおよぶ広範囲で、海岸から１．５～４ｋｍも遡上する大津波が襲ったものであったことが明らかにされた。また、この調査から、この地域の巨大津波の再来間隔は、四五〇年から八〇〇年であることもわかり、

直近の巨大津波からはすでに五〇〇年以上経っており、貞観巨大地震・津波からは一〇〇〇年以上経っていることを考慮すると、この地域を再び巨大な地震・津波が襲うのは、いつ起こっても不思議ではないことが予想された。しかしこの津波堆積物の調査に基づく科学的な予測は、なかなか地震学会全体の共通認識にはならなかった。なぜなら当時の支配的な学説では、岩手県から茨城県にかけての日本海溝西側の深海底には、大地震を起こす可能性のある震源域が４つ想定されており、この地域のプレート同士の結びつきは弱いため、それぞれの地域で三〇～四〇年おきにＭ７級の地震が起きてプレート境界にたまった歪を解放するために、巨大な連動地震は起きないと考えられていたからだ。そしてこの説を立てた学者の高弟（東大名誉教授阿部勝征氏）が地震学会のトップにたち、地震防災を管轄する地震調査研究推進本部の地震調査委員会委員長（当時）のポストを占めて来たため、津波堆積物の調査に基づく科学的予測に、学会としての合意形成に時間が掛ってしまった。実際に巨大地震・津波が起きてしまったあとで、阿部氏は、「東北・北海道周辺では最大でもＭ８というパラダイム（思考の枠組み）に縛られ、最初からＭ９は起きないと思い込んでいたことが個人的な反省だ」と述べている（毎日新聞２０１１年４月１２日）。

　このため実際の津波被害を軽減する措置を担当する行政に科学者たちが説明してもなかなか理解してもらえず、「今日起こっても不思議ではない」ということは「いつ来るかわからない」と受け取られてしまって、有効な対策が取られることもなかったのだ。

注

津波堆積物によって巨大地震津波が予測されていたことについては、産業技術総合研究所の宍倉正展著『次の巨大地震はどこか！』（２０１１年９月　ミヤオビパブリッシング刊）が詳しい。また津波堆積物による巨大地震津波の予測を拒否した地震学者の理論的問題点については、東大地震研の地震学者の大木聖子・纐纈一起著『超巨大地震に迫る―日本列島で何が起きているのか』（２０１１年６月ＮＨＫ出版刊）が詳しい。

そしてこのことは原発の場合も同様で、電力会社が予測する６ｍの津波をはるかに凌駕する１０ｍ以上の巨大津波が原発を襲う危険性が高いことを審議会の場で科学者が説明しても、「実際にこの地域をそれだけ高い津波が襲った記録がない」として対策をとることを電力会社が拒否したのだ。あたりまえである。過去の津波の高さを測定することはできない。地層から判断出来ることは地形に沿って津波が遡上した海抜高度だけなのだから。科学的に予想されたことが無視されたのだ。

注

巨大津波の可能性を無視した経過は、FUKUSHIMA プロジェクト委員会著『FUKUSIMA レポート―原発事故の本質』（日経ＢＰ２０１２年

1月刊）に詳しい。本書は併せて、原発がメルトダウンを起こしたのは東電経営陣が海水注入を躊躇ったからだとの真の原因をデータを元にして明らかにするとともに、日本の原子力政策の問題点もあきらかにしている。

東日本大震災と原発事故は、人災だ。巨大な地震に伴う大津波が襲うことが予想されていたのに、その予想を「科学的には根拠なし」として長い間認知することを拒否し、行政が被害軽減のための対策をとることを阻害した学会重鎮たちや、同じく大規模な津波に原発が襲われる危険が現にあると指摘した科学者の言を無視して、なんら根本的な対策をとることなく漫然と原発を運転し続けて、深刻な放射能災害を生み出した東京電力とこれにつながる原子力「科学者」、そして政治家たちに根本的な責任がある。

どうしてこれらに対して怒りの声を挙げ、正当な補償を要求しないのか。そしてこの補償を糧として、災害後に移り住んだ場所であらたな「ふるさと」づくりに励んだり、戻ることが可能な場所では、新たな街づくりに精を出すことが必要だと思う。失われたものを懐かしんでいても、それは元に戻ることはないのだから。

また、こうした大災害で「ふるさと」を失ったのではなく、春田さんのように仕事を求めて「ふるさと」を出て大都会で暮らすうちに、「ふるさと」自身の変化によって「ふるさと」を失った人は、「ふるさと」からの人の移動が最も激しかった高度経済成長期からすでに長い年月が経った現代の都会には大勢いる。そして都会に来た時は２０歳前後だったこの人々も、今日では人生の黄昏の時期に遭遇している事と思う。

人は人生の黄昏の時期に遭遇すると、昔を懐かしむ言動を必ずと言って良いほどする。これはこれで、自分の人生を残りわずかになった時にあたって振り返り、いわば人生の総括をしてみる試みであり、残された人生をより有意義なものにしようという、当然の行動であるとは思う。そしてそういう時期に遭遇して、心に残っていた懐かしい「ふるさと」の風景を求めて現地を訪ねたとき、思い描く「ふるさと」の風景はすでに、心の中にしか存在しない現実に直面し、自分を育んでくれた光景が幻となったことで、まるで自分という人間の存在そのものが幻であったかのような感慨に打たれることも、これは当然のこととは思う。

しかし失った時と場は、二度とふたたびもどることはない。人生の黄昏に遭遇した今こそ、自分が成人して社会人となり、社会の中で活動してきた日々とその活動を相対化し、自分の人生の在り方を今一度再評価して、残された人生を有意義に過ごすとともに、限られた自分の経験ではあっても、そこから得られた人生の教訓を、後進に提示することを大事にする必要があるのではないかと思う。

「転勤族」の息子としての日々

１　父母の馴れ初め・出生の地小田原

　私が生まれたのは、神奈川県小田原市中島地区。丹沢山地に発する大河酒匂川が相模湾に流れ込む、河口のすぐ上流のところにある町。１９５０（昭和２５）年1月8日のこと。大手電機メーカーの幹部社員である川瀬泰久（１９１８～２００５）とその妻新（しん）（１９２５～）との間に長男として生まれた（ただし前年に生まれた赤ん坊は生まれた時逆子で死産であった。この「兄」が無事生まれていたら、私は生まれなかったであろう）。この町と酒匂川をはさんで対岸にあるのが、父方の親族が先祖以来長く住んでいる酒匂の町だ。

　この酒匂の町で１８８１（明治１４）年に生まれた父方の祖父・泰重（１８８１～１９４４）は、家の仕事を継ぐのを嫌って、小学校を出た後商家で働きながら独学して、高等小学校卒業資格を得、台湾にわたって台湾総督府の役人になった。もっとも高等小学校卒だから出世はできず、次々と帝国大学出の若者に抜かれて、最後は台湾の高雄州の支庁文書課長という下役で退職した。このため祖父は、長男にはぜひとも帝大に進学させ、高等文官試験に合格させて官僚の道を進ませたいと考えていたそうな。

　祖父の実家の家業は、江戸時代以来わずかな畑で作った野菜を東海道沿いに家があるのでそこで売って稼ぎ、足りない分は屋根大工をして補うという、水呑百姓だった。祖父は家業と父母の世話を弟に譲って台湾に渡ったため、戦争中に引き上げで全財産を失っても、戻るべき実家もないため、近くの町にわずか二間の借家を借りて住んだという。

　ちなみに父方の川瀬家は、伝えられているところによると先祖代々の水呑百姓。川瀬と名乗ったのは、明治になって平民にも名字を名乗ることが許されてから。ちょうど昔から住んでいる部落の横が酒匂川の川瀬だったので、部落あげて川瀬と名乗ったと父からは聞いている。酒匂の川瀬家の菩提寺に行った時、たくさん川瀬の名を冠した墓石があったので聞いたところ、父が教えてくれたことだ。従って川瀬家がいつから酒匂に住んでいたのかは、確かめる術はない。

　１９１８（大正７）年に台湾でこの泰重・マス（１８８７～１９４８）夫妻の間に二男（長男がすでに他界していたので事実上は長男）として生まれた父・泰久は、当初は中学５年を終えたら教師になりたいと考え、東京か広島の高等師範学校に進もうと考えていた。しかし官僚への道を望んでいた祖父が、中学４年の時に「腕試し」に台北の旧制高等学校を受験しろとすすめたので受験したところ合格してしまったので、父は台北高等学校に進学。そして卒業したあと一浪して東京帝大法科に進んだ。しかし祖父の希望に反して父は高等文官試験をうけず、ＮＨＫに入って政治記者をするか、大手電機メーカーに入って、そこで労働者のための労務管理をやろうと考えて二つを受験。結局大手電機メーカーに合格して幹部として横浜鶴見で暮らしていた。父によると、ＮＨＫの合格の知らせはなかなか来ず、定年退職した父と、母や三人

の弟妹を養わなければならなかった私の父は、先に合格通知の来た大手電機メーカー入社を選んだ。ＮＨＫの合格通知はその後に来た。学生時代にマルクス主義に触れていた父が、もしＮＨＫ政治記者の道を選んでいたら、どんな人生になったことだろうか。電機メーカー幹部となったあとも、その初期の志を強く持っていたので、部下をかばってしばしば上司と対立して、左遷の連続であったようだから。

しかし父は、１９４２（昭和１７）年９月になって招集を受け、一兵卒として南方のハルマヘラ島に送られた。父は大卒だから幹部候補生となって少尉任官できたのだが、戦争反対論者でこの戦争は必ず負けると考えていた父は将校になることを拒否。ために非国民とされ、南方の激戦地最前線に送られた。ハルマヘラ島は激戦地ニューギニアの西にある、香料諸島という群島の一つの島であり、その北隣には日本軍の航空基地がおかれたモロタイ島があった。このモロタイ島の航空基地およびニューギニア戦線の後方支援として、ハルマヘラ島に大規模な田畑を開墾して食糧を供給する目的で編成された農兵の部隊に父は配属された。しかし配属地に赴任して間もなくモロタイ島はアメリカ軍に占領され、奪い返すべくハルマヘラ島の師団は何度も突撃を繰り返したが敗退。結局父がいた連隊は、せっかく持ってきた農具も棄てて、ジャングルの中を「転戦」。転々とする駐屯地を襲う米軍機の空襲に怯えながら、この闘いは終戦後の昭和２１年まで続いたという。

日本軍が降伏したことは米軍機のビラで知っていたが投降もできず、結局厚生省の係官が来て投降を呼びかけたことを契機に投降し、終戦から約一年後の１９４６（昭和２１）年５月にようやく日本に戻った。そして戦争中に父親が借りていた小田原市中島の小さな借家に、母と３人の妹弟とともに生活しながら、鶴見の工場に通勤する日々となった（父親は息子が帰還する前に病死）。

父の妹が習いごとの縁で母・新の姉と知り合い、二人は見合いして結婚することとなる。１９４８（昭和２３）年の２月１１日のこと。この一月前に、父の母親も病死している。

母方の祖父・松本均（１８７８〜１９５０）は、京都帝大で工業化学を教えていた科学者（醸造学講座と高分子合成学講座を担当）で、妻・利（１９８６〜１９６１）との間に娘５人息子２人を儲ける。母はその末っ子の５女。母の上の姉たち３人（姉の１人は早逝）はすべて京都帝大を出た科学者や銀行マンに嫁いでいる。父が母の結婚相手に選ばれたのは、父が東京帝大を出ているということが最大の理由。父の家族はやっかいで嫁ぐと苦労するだろうが、父の人物は良いし、２０歳を過ぎてしまった母は、これ以上行き遅れるわけにはいかないとのことで、親族会議で嫁にやることに決まったという。父が母を選んだのは、器量は悪いが、気立てが良く、弟や妹の面倒もしっかり見てくれると考えたからだそうな。このことを、昔、父から聞いた父の妹の息子は、「ひどいな、おじさんは」とすっかり呆れていた。

２人の新婚生活は、わずか2間しかない家に、夫婦と夫の妹・弟２人の生活だった。父の会社はなかなか給料をきちんと払ってくれないので、父は内職として、靴下やネクタイなどを仕入れて、会社の帰りに、横浜の鶴見から小田原まで戻る途中の車内や駅で売って稼いでいたという。

そんな所に私が生まれた。

この小田原市中島の家についての記憶はまったくない。この小さな借家に住んでいたのは約1年半。父が横浜市鶴見区鶴見町の会社の社宅に入れたのでそこに転居したからだ。

２　「転居の日々」①横浜市鶴見区鶴見町

この時に夫婦２人と赤ん坊、そして父のすぐ下の弟が一緒にオート三輪車に家財道具を積み込んで家族一緒に小田原から鶴見に移ったそうだが、その時のことも全く記憶にない(父の妹は、私が生まれてすぐ縁談があり、東京の日暮里に住む。そして下の弟も父の手配で父の勤めていた会社に仕事を得て、東京に住む)。

この鶴見の社宅に移ってすぐ、弟が生まれ、その後妹も生まれた。

この鶴見の社宅は後に住人に払い下げられて自宅となり、子供部屋を増築したのだが、ここでの暮らしの後半はわずかに記憶に残っている。

近所に同じ会社に勤める人達がいて、たしか二軒長屋が４棟。その一棟に住んでいたのだが、隣の家の掛け時計のボンボンという音が我が家にも聞こえてきて、それを聞いた私が「なんでおうちには時計がないの」と言ったので、両親はあわてて柱時計を買ったのだそうだ。子供３人に父の弟も養わなければならず、独立した妹と弟への援助もまだ続いていたので暮らしはかなりきつかったから、家にある時計と言えば小さな目覚まし時計だけだったからだ。この柱時計は今も我が家のリビングの柱にかかっている。あの大震災の激しい揺れで傷ついたのか、すでに動かなくなってはいるが。

近所には同い年のK君がおり、幼稚園も小学校も一緒だった。少し離れたところにある大手鉄鋼メーカーの社宅には、幼稚園の時から仲良くなったYさんがおり、この娘とは、大人になったら結婚しようねと言って、いつも手をつないで幼稚園や小学校に通っていた。あと記憶にあるのは、家は鶴見の駅前の商店街を過ぎて諏訪坂という坂を上る途中にあるのだが、その坂から見た下の町の景色と、坂の下にある、鶴見の商店街とは異なるレアルト通り商店街の風景。ここは小さい時から毎日のように行くところで、母が言うには、３・４歳ごろにはすでに商店街の店の名前や商品を覚えていて、母に連れられて買い物に行くと、次々と商店の名前と商品名を当てて、大人たちをびっくりさせたそうな。この話は自分では覚えていないが、商店街の風景はまだ記憶の底にある。

また幼稚園入園のときに、私はひと騒動持ち上げたそうな。なんと入園試験のとき、面接官に一言も応えず、出された問

題にも一つも答えなかった。それで面接官が、この子は社会性が足りないので、もう半年してから来てみてくださいと言われて、入園が半年遅れた。家に帰ってから母がわからないのかと私に聞いたら、「全部わかっているけど知らないおばさんとは話したくない」と答えたそうな。このときの記憶も全くないが、幼稚園に通う道のりや、幼稚園の建物はまだ記憶の底にある。また2歳半下の弟に言わせると、私はよく近所の子供たちにいじめられて泣いて帰って来たのだが、その際には弟が代わりに駆けつけて兄のかたき討ちをしたという。これもまったく記憶にない。たった一つ鮮明に覚えているエピソードは、あるとき、たしか小学校に入学してしばらくのことだったが、学校からの帰りに、家の玄関の硝子戸に飛び込んで大けがをしたこと。この社宅は諏訪坂の途中を横にそれたわき道から、少し下った窪地にあるのだが、家の玄関の前まで、急な坂道が続いていた。この坂道を駆け下りて来た私は、そのまま玄関の硝子戸を開けないで、硝子戸に飛び込んでしまった。おかげで手首に大けがが。出血が激しく大騒動になった。この手首の傷は今でもくっきり残っている。

　この鶴見の家も住んでいたのは、6歳の年の１１月まで。ちょうど小学校に入学して初めての夏休みを体験し、２学期も終わりに近づいたころ。今度は父の転勤で、三重県三重郡朝日町という遠いところに転居した。増築中の子供部屋がもう少しで完成と言うところでの転居なので、とても残念だったことを覚えている。１９５６（昭和３１）年１１月のこと。

　残念ながら鶴見の近所の人たちの大部分の顔は思い出せない。先に記した友達Ｋくんと、初恋の人・Ｙさんの顔だけしか覚えていない。そしてここで出会った人たちとは、次に住んだ三重県から再び横浜に戻った時、5年ぶりに旧社宅を訪れた時に会ったＫ君の家族以外は、今に至るまで二度と会うことはなかった。6年生の春まで5年あまりもの間しばしば手紙のやり取りをしていたのに、突然音信不通になってしまったＹさんも含めて。転勤族の子供にとって、育った町で出会った人とは、ほんのひと時のかりそめの出会いなのだ。

　鶴見の町にはその後、大人になってから一度訪ねたことがある。でも町並みはすっかり変わっていて、住んでいた二軒長屋の住宅もすでに建て替わり、住人もすべて入れ替わって昔の面影は消えていた。諏訪坂の途中から下の町を見下ろす光景だけは同じだったが、そこに見える建物のほとんども変わっていた。

3　「転居の日々」②三重県三重郡朝日町

　引っ越し先の三重県三重郡朝日町には、父が勤める電機メーカーの白物家電を作る主力工場があって、そこには大規模な社宅があった。山の緩い斜面に展開する社宅だったが、途中にあるため池と大きな広場を挟んで、上の方は幹部社員の社宅、下の方は平社員の社宅に分かれ、幹部社員の社宅はすべて一戸建てなのに、平社員の社宅は二軒長屋だった（幹部

社員の中でも、工場長と副工場長の家はまた別格で、白壁の大きな二階家であった)。その二軒長屋群の真ん中に大きな銭湯があり、ため池のすぐ下には、社宅専用の理髪店もあった。

最初に住んだのは平社員用の二軒長屋。父は課長代理だったが、上の幹部社員用住宅に空きがなかったからだそうな。家のちょうど目の前が銭湯だった。ここで初めて銭湯を体験した。鶴見の家は、内湯だったからだ(上の幹部社員用社宅に移ってからはまた内湯となったが)。

社宅のすぐ下は、国鉄の関西本線が走り、社宅の真ん中の通りを駆け下りると、そのまま踏切となっていた。この踏切で、自転車で駆け下りてきてそのまま止まれず、走ってきた蒸気機関車の動輪に飛び込んで死んだ小学生がいたことは今でも記憶に新しい。この日私も自転車の稽古で社宅内を走っていたので、踏切で小学生が自転車に乗ったまま蒸気機関車に突っ込んで死んだと社宅内を情報が飛び交った時、母は私ではないかとすぐに現場に駆け付けたという。幸い私はまだ坂道を暴走できるほどには自転車に上達しておらず、わき道をやっこらと走っていただけなので、踏切の方で蒸気機関車がけたたましく警笛を鳴らしていたのを聞いていた。物見高い友人たちは現場に走ったが、とても悲惨な状況になっていることが想像されたので、怖がりの私は見に行かなかった(見ていたら悲惨な光景が今でも夢に出てくるだろう)。

この朝日町には町立の小学校があった。前の鶴見の小学校は生徒数が多いのに校舎が狭いために、どの学年も午前か午後に分かれて授業をしていたので、朝から午後まで続けて学校に行ったのは、この朝日町の小学校が初めてであった。鶴見の小学校では男子はみんな半ズボンだったのに、ここでは長ズボンで、赤い色が好きでよく赤いセーターを着ていた私は、ズボンが短いことと赤い服を着ていることで、同級生からなんどもいじめられたものだ。

この朝日町には、1年生の2学期の末から6年生の1学期の終わりまでいた。

ここのことははっきり今でも覚えている。家の形から町の姿までくっきりと眼に浮かぶ。

ここでの5年間で最大の事件は、伊勢湾台風。観測史上最大の死者を出したあの台風。小学校4年生の秋。1959(昭和34)年9月26日から27日のことだった。

超巨大台風が襲い来るのに、学校の対応は遅く、一斉下校したときにはすでに激しい風雨で傘もさせない。家に戻る途中で、関西本線の横にある建築中で骨組みに屋根を載せただけの二階家が、強風のためにべちゃんとつぶれるのを目撃した。家に戻ると、会社から戻った父と、父の弟二人が、長い木の板を出してきて、雨戸を全部釘付けしていた。強風で窓が割られないためである。明け方まですごい強風だった。外から釘付けした雨戸は、強風でしなって、内側の硝子戸までしなって飛ばされそうに。大人総出で、畳を上げて窓際に立てかけ、タンスなど大型の家具をその横に置いて、さらに大人が上に座って飛ばされないようにしていた。私もこの「重

石」の一つとなったが、そのうち天井のあちこちから雨水が落ちてきて、至るところが雨漏り（あとでわかったことだが、強風で瓦が全て飛ばされたためだ）。この夜は一睡もできなかった。弟と妹は、机の下ですやすやと寝ていたが。

朝が来るとすぐに家を飛び出した。家のすぐ横の高い崖が崩れ、松の木が多数落ちてきていた。家の瓦はすべて飛ばされ、裏の家の物置と、鶏小屋が数十メートルも遠くに飛ばされていた。もちろん鶏は即死。急いで下のため池に行った。このとき父は総務課長となって上の幹部社員用の社宅に住んでいたからだ。ため池の縁に立って下の町を見て、我が目を疑った。関西本線のもっと下に、近鉄線の線路が走り、その向こう側の海際に田んぼが広がり、その先に村が三つと町が一つあったのだが、その村や町や田んぼが消えて、すべて海になっていた。そして遠目にも、近鉄線の線路の上に多数の船が打ち上げられているのがはっきり見えた。

急いで自転車を出して坂道を猛スピードで駆け下りた。関西本線も完全にストップしていた。小学校まで来て中に自転車を入れると、海水は校庭にまで押し寄せ、校庭は瓦礫や家財道具で埋まっており、高波から逃げたのであろうか、大量のイナゴが、波で土壁が落ちてしまった講堂の壁にびっしりと張り付いていた。あたりには鼻が曲がるほどの異臭が漂っていた。気持が悪いので急いで家に戻ったが、あとで会社から戻った父の話では、海水が到達したところにはいたるところに動物や人の死体が打ち上げられており、すでに死臭を放っていると。しばらく海水が到達したところには行くなと言われた。でも毎日行方不明になった工場の社員を探して近所の町や村を歩きまわった父の靴の底からは、あの鼻が曲がるほどの異臭が漂っていた。

ちょうど台風の目が海岸付近を通過した際に満潮だったために、大規模な高潮が起こり、防潮堤を突き崩して海水が襲いかかって来たのだそうだ。我が家は高台にあったので高潮には襲われなかったが、台風の目のすぐ外側が付近を通過したため、激しい強風にであったのだった。

しばらく都市ガスも電気も水道もとまった。幸い家のすぐ裏には山からの湧水が流れていたのでこれで飲料水はまかない、買い置きの食糧を薪や炭で火をおこして調理して食べた。買い置きの食糧が尽きたころ、高潮で線路が流されて立ち往生した関西本線の貨物列車に大量のサンマが積まれており、それをただで配るとの情報がもたらされた。大人たちは総出でもらいに行き、おかげで朝から晩まで食卓にサンマがのぼる毎日となった。

隣町の小学校は、全校児童の約三分の一が高潮で死亡していたが、幸い朝日町の小学校は校庭が瓦礫で埋まり講堂の壁が落ちただけの被害で済み、すぐに学校は再開された。そして幸いにも死んだ児童は一人もいなかった。

この小学校に当時としても珍しい円形校舎が建てられ、冷暖房完備でエレベータ付きだとの情報が流れ、この校舎に入れるのを楽しみにしていたのだが、完成直前に、またしても

父の転勤のため朝日町を離れ、今度は横浜市港北区日吉本町というところに転居した。父が栄転で、川崎市の本社工場の総務部長となったため、日吉本町にあった社宅に入居することになったからだ。１９６１（昭和３６）年８月のこと。

日吉の話に行く前に、朝日町での我が家の二つ目の事件のことを書いておこう。それは、父のすぐ下の弟が結婚して家を出たこと。一番下の弟もすでに結婚して家をでていたので、父の弟や妹の面倒をみるという、母の一番のお荷物が片付いたと子供心にもほっとした出来事だった。結婚式は隣町の桑名の神社で執り行われ、そのあと輪中の巨大な堤防を登って降りて渡し船に乗り、新郎新婦とともに初めて、伊勢長島の輪中の村に行ったことを良く覚えている。

しかし残念ながら、母の苦労はこれで終わりではなかった。父の弟や妹たちは、結婚後も生活が安定せず、これ以後もたびたび父に金の無心に訪れ、妹や弟の家族の生活支援は、延々と父の晩年まで続いた（ただし三重にいた時に結婚した叔父は、それまでは酒びたりで仕事も熱心ではなかったのだが、子供に恵まれてから心を入れ替えてしっかり働くようになったので、父からの支援は不必要に。後年亡くなった叔父の納骨の際に、父が叔父の妻女に、あなたに巡り合ったおかげで弟は幸せな人生を送ることが出来たと感謝していたのが心に残る）。父はその後さまざまに上司とぶつかって左遷されることもあったが、逆に父の手腕を認めてくれて引き上げてくれた上司もおり、朝日町を出た後は総務部長→関西支社次長・営業部長と栄転し、その後また上司とぶつかって、今度は子会社設立の担当常務となり、以後子会社の常務としていくつかの会社を転々とした。このため給与がどんどん上がって暮らしはもっと楽になるはずであったが、父の定年退職後まで、父の弟や妹の家族の世話が続いたため、母は家計を切り詰めてやりくりする毎日だったのだ。二人の重い荷物がなくなったのは、父の弟や妹の子供たちが全員自立し、それぞれの親の面倒をみるようになってからのことだった。父と母の結婚５０周年（１９９８年）ごろのことだった。

朝日町には、大人になったあと、家族でもう一度訪ねたことがあった。１９９２（平成４）年の秋、たしか９月のことだった。その前年に朝日町にいた間に縁あって結婚して、朝日町の隣の桑名町のさらに隣、長良川と揖斐川に挟まれた長島町に住んでいた叔父（父の弟）が亡くなっていた。その遺骨を納める墓が、桑名の、元桑名藩主松平家の墓もあるという由緒ある寺に建てることができたというので、仕事を休んで、父母と妹の４人で納骨式に参加し、その足で隣町朝日町を訪ね、小学校や社宅を訪ねてみた。小学校は離れた時のままだったが、社宅はすでに廃止されており、建物を取り払ったあとの土台だけがむなしく残っていた。道路はそのままだったので、道筋をたどって、最初に住んだ下の長屋跡と、次に住んだ上の一戸建ての家の跡を探して訪ね当てた。社宅の途中にあったため池と広場はそのままあったので、そこに佇んで町を見下ろしたが、社宅の甍はすでになく、その下の朝

日町の街並みも大きく変わり、朝日町およびその海側に広がっていた田んぼはすでに消滅して、全部大きな町に発展していた。
朝日町の光景もすでになく、そしてここで出会った人たちとも、父と同じ会社に勤めていた人たちやその子供たちも含めて、一人の同級生K君を除いて、二度とふたたび出会わなかったことは、鶴見の時と同じだ。

4　「転居の日々」③横浜市港北区日吉本町

１９６１（昭和３６）年8月に移り住んだ横浜市港北区日吉本町の社宅は鉄筋コンクリートの5階建てのアパートで、家の間取りは朝日町の一戸建ての住宅とほぼ同じなのに、あまりに狭いのに驚いた。この時に初めて団地サイズという小さな畳に出会ったわけで、その上に、家の中には中廊下もないので部屋と部屋とが襖で仕切られただけなので、全体もひどく狭いものだった。そして母と私にとって残念だったのは、初めて庭のない家に住んだことだ。このため朝日町では庭全体に植えていた木々や花々を持ってくることはできず、わずかに運んできた、元々は鶴見の家に生えていたヤブランの一群を、アパートの下にある共同の花壇の片隅に植えて、なんとか命をつないだだけであった（このヤブランは、その後転居した今の家に持っていき、今でもわずかではあるが、軒下に生きながらえて毎年秋に、紫の小さな花を咲かせてくれている）。
ここは日吉本町ではあったが、東急東横線の日吉駅のそばにある日吉台小学校の学区ではなく、その分校の下田小学校の学区の一番はずれにあった。このため日吉台小学校の方がすぐ近くだったが、３０分ほど歩いたところの下田団地の真ん中にある下田小学校に、弟と二人で通うこととなった。行ってみてびっくりしたのは、この学校が円形校舎であったことだ。朝日小学校で入れなかった円形校舎。これにここで入れるとはビックリしたものであった。
ここには翌年１９６２（昭和３７）年3月の末までの7ヵ月ほどの短い間しか住まなかった。周りはみんな父の勤めた会社の人ばかりだが、近所付き合いもなく、団地には同じ学年の者もいなかったので、一人で通う毎日だった（弟は同じ学年の子がいたのでこの子と通った）。6年生の2学期からの転校生で、そのクラスは5年生からの持ち上がりだったので、一人浮いてしまい、なかなかクラスになじめなかったことを今でも覚えている。しかし担任がとても細かく気を配ってくれる人だったので、やがてクラスにもなじみ、毎週発行する班新聞をガリ版で切って発行していたが、この作業にも慣れ、そのうちに自分の好きなお話を書いて連載したり、読んでとても興味を覚えたお話を転載したりしていた。また、社会科の時間に班単位で調べ学習をして、模造紙数枚に調べた内容を書いて発表するといった授業を何回もやることとなった。今思う班新聞や調べ学習というのは初めての経験であった。

に、この担任は、当時としてはとても進んだ教育活動をやっていたようで、こうした取り組みは、次に移り住んだ川崎市の中学校でも見られず、わからないことはすぐさま辞書を引いて調べるという、今でも身についている習慣が形成されたのも、この先生のおかげだと思う。

ただ残念ながらわずか7ヵ月のクラス活動だったので、クラスにはなじめたが、仲の良い友達というのはここでもあまり出来ず、一人だけ仲良くなって家にも何度も遊びに行ったＳさんという娘とはその後も文通したが、なぜかやがて途絶えてしまった。従って卒業してからも自分だけ川崎市に転居したためもあって、クラスメートとの付き合いは、それっきりとなった。

この四度目の転居のときSさんのお母さんが、今度の家は庭が広いということを聞いて、Ｓさんの家の庭にあった雪柳の木とさつきの木をそれぞれ一本ずつ贈ってくれた。この二本の木が、我が家の約６０坪はある庭に植えた最初の花木で、さつきの木は数年前に枯れてしまったが、雪柳は種から何本も子孫が増え、庭のあちこちで今でも咲いている。

この日吉本町には、大学を卒業して中学校教員となり、いろいろ政治活動をしていたころ、この近所に住んでいた仲間がいた関係で時々足を運ぶこともあった。しかしここを離れて１５年くらいしか経たないのに、町並みは大きく変わり、当時住んだアパートもなくなっていた。小学校の円形校舎は昔のままで団地そのものもそのままで、唯一の彼女の家もそのままだったが、尋ねる勇気は出ず、前を素通りした。これからまた１０年ほどたった後、母が俳句の会に通うようになったとき、そこでＳさんのお母さんに再会し、その後２０年以上俳句の会で親しく付き合うようになるとは、思ってもみなかったことである。この母親同士の再会によって、すでに結婚し子供も数人育てていた彼女のその後のことを聴くことにはなったのだが。

５　「転居の日々」④川崎市多摩区長尾町

こうして１９６２（昭和３７）年3月。今も住んでいる川崎市多摩区長尾の我が家に引っ越した。

この家は父の勤めていた会社が社員のために建てた分譲住宅で、およそ８０軒からなっていて前年の１１月には出来上がっていたのだが、私の小学校卒業と、弟が小学校３年修了を待って転居した。他の人たちは１１月に入居していたので、4か月ほど遅れての入居だった。

そして転居して1年経たないうちに、我が家では台所を広げてダイニングキッチンとし、子供部屋を増築し、それに伴い１０数ｍはある長い外廊下を増築した。小学校1年のとき鶴見の家で実現寸前に転居したので入れなかった、初めての子供部屋ができたわけだ。弟と二人で半分に分けて使った（ここに転居して小学校に入学した妹は自分の部屋を作ってもらえなかったので、これは後年になっても不満だったそうな）。

家の敷地はおよそ９０坪。そこに増築した結果約３０坪の家が建っている。約６０坪ある庭には、最初は真ん中に大きな芝生を作って子どもたちの遊び場になっていたが、時が経つにつれて、母と私とで作る花壇がどんどん広がり、水連池が一つと大賀蓮の入った大鉢が三つ置かれ、今では数百種の花や花木で埋まっている。

４月からは私は隣町宿河原にある地元の中学校（川崎市立稲田中学校）に通い、弟はこのとき小学校に入学したばかりの妹を連れて、同じく隣町宿河原にある小学校（川崎市立稲田小学校）に通う生活がはじまった。

ここが私にとって最も長期間住んでいるところで、今年で５２年にもなる。しかし中学入学と同時に転居したところで、同い年の子はわずかに男１人と女３人の計４人で、しかもこの人たちとは中学三年間で一度も同じクラスにはならず、部活動も同じではないため、友達と言えるものではなかった。また周囲は町とはいっても商店もほとんどない昔ながらの農村で、住民は江戸時代から住んでいる人たちが多く、後から田んぼや畑をつぶして出来た住宅地に入ってきた住民を「よそ者」と呼んで疎外したから、子供の世界ではもっとひどいもので、完全な仲間はずれであった。もっとも中学生にもなれば一緒に近所で遊ぶということはなく、学校でのクラスや部活での活動が日々の中心を占めるので、地域の子との付き合いはほとんどないので、日常的な仲間はずれはないわけなのだが。

私は、中学三年間を通じて、同じ住宅にも近所の町にも、同じ部活（書道部にいた）のものはおらず、クラスで仲良くなった者も、隣の宿河原町の住人ばかり。学校から帰って友人の家に遊びに行くには、隣町まで２０分とか３０分歩かねばならず、中学を卒業して高校に進学した時点で皆別の学校に行った関係もあって、友達づきあいも中学だけで終わってしまった。そして同じ住宅の中で同じ高校に行ったのは女子２人だけだった関係もあり、近所の同年の者とも、高校進学時点で声すらかけあわない状態になっていった。

６　近所づきあいも薄いままに

現住所に中学入学の時引っ越してきたわけだが、その後も父は転勤が続いた。最初は同じ市内の工場間の転勤であったが、私が一浪して大学に入ることになる１９６９（昭和４４）年の一月に、大手電機メーカーの関西支社に転勤となった。この際家族は同行せず、父は兵庫県芦屋の会社の家族アパートに一人で住んで自炊し、大阪の会社に通うこととなった。母は父の健康を心配して毎月一度は芦屋に行き、一週間ほど滞在していた。この間の我が家の食事は私が担当した。家族が同行しなかったのは、私が大学入学、そして弟は高校二年、妹も中学二年。それぞれが転学することのリスクを考えてのことであった。父は一年余りでここを辞め、新会社設立担当役員となって川崎の我が家に戻ってきた。上司と経営方針を

めぐって対立して干されたからだそうな。そして新たに設立された子会社の常務となったが、主力工場は群馬県にあったが本社は東京。その後移動した子会社もすべて東京周辺にあったので、何度も続いた我が家の転居は、１９６２（昭和３６）年に現住所に引っ越したことが最後となった。

こうした事情で、５２年も住んでいる現住所には、竹馬の友も親しい友人もいないというありさま。大学卒業後に市内の中学校教員の職を得てここから通勤することとなったのだが、職場も同じ川崎市内と言っても他の区内の学校でもあったので、近所付き合いは皆無に等しい。そして５３歳で教員を早期退職したのだが、近所との付き合いは全部、父が２００５（平成１７）年に他界するまでやっていたので、近所の人とも顔を合わせれば挨拶をする程度の付き合い。本当にここには住んでいるだけという状態が今でも続いている。

２年前に現住所の町内会の班長が１２年ぶりに回ってきた。今回は父がすでに他界していたので私がやり、班長会の成り行きで私が町会長となって初めて、この町内会の人たちともいろいろな場面で関わることになった。またこの町内会が加盟している長尾町会の地区長会にも毎月参加することとなったので、地域の人たちとも少しつながりが出来た。

もっとも父は町内会の町会長を３回、そして長尾町会の役員を副会長や管理部長という形で１０年以上やって、町内会館建設事業を推進したりして、地域の顔役でもあった。町内会は同じ会社の従業員のための分譲住宅であったということで、多くは三つほどの工場の社員からなっていたのでお互いに家族ぐるみの付き合いがあったのだが、父だけが唯一本社の幹部社員。学歴も会社での地位も飛びぬけていた関係もあったのだろう、同じ住宅の人たちからは「親分」と呼ばれ、いろいろ担ぎ出されていたようである。そして父自身も積極的に地域に関わろうとしていて、町会役員を何度もやるだけではなく、長尾地区には市議会議員がいないことから、母の関係で知り合った人が市議会議員になったときにその後援会の幹部ともなり、さらにこの議員が引退したあと、長尾町会の会長が議員に立候補した際にも、この後援会の幹部ともなって、その当選に尽力した。母も、弟や妹が通った小学校中学校のＰＴＡ役員をやり、さらに地域で合唱サークルを作ったり、婦人サークルを作って、あちこちハイキングや社会見学やボランティア活動に繰り出したり、町内会館を根城にして、地域の歴史を学ぶ会などを企画運営していた。この地域の歴史を学ぶ会には途中から私が駆り出され、何度も地域の歴史を話すことになった（この時の資料は、私のサイトの「地域史」のコーナーにすべて載せてある）。

こうした父母と地域との関わりの関係で、私の家のことを知っている人が地域に多数いる関係で、私も地域ではある意味知られた存在ではある。しかし今のところは、自分の興味のある研究課題に専念してあまり地域に関わろうとはしていないので、町会長を退任した今では、やはりこの地域とのかかわりは希薄なままだ。

少し長くなってしまったが、このようにして私にとっては「ふるさと」と呼べる地域も、「ふるさと」の人との繋がりも経験がないのだ。

家の大本としての「ふるさと」とも無縁な人生

その上、父母のそれぞれの家の「ふるさと」とも、私自身長い間関わりがなかった。

1　一度も住んだことのない父方の「ふるさと」

父方の「ふるさと」である小田原市酒匂。

父はここに一度も住んだこともなく、唯一の関わりは、酒匂の先祖代々の墓があるお寺に、父の父母と兄の墓を営んでいたことだけであった。

父が戦争から戻った時、家を継いでいた祖父の弟から言われたそうな。お前のところが本家だ。だから畑も相応の取り分があるから取ってくれと。しかし父は、「家のことも祖父母のこともぜんぶ叔父さんにお任せしてしまったのだから、何もいらない。どうしてもということなら墓地だけわけてください」と叔父に言ってもらい、後年少し生活に余裕が出てから募石を建てたのがこの墓だ。この墓も先年、横浜のお寺にある弟（１９８４年に仕事中の事故で死去。３２歳）と父の墓に合葬したので今は酒匂にはなく、酒匂には父方の祖父の実家に、祖父の弟の息子とその一族が住んではいる。しかし、父は従兄弟会で付き合いがあったが、私にはこの付き合いはないので、先祖代々の地酒匂とのつながりもほとんどない状態だ。

私が酒匂を訪れたのは、記憶に残っている範囲では、三重県の朝日町から横浜に戻ってしばらくしたとき、父に連れられて墓参りしたのが最初。二回目は、教員となってから一度、職員旅行で箱根に行った帰りに、仲間と離れて酒匂のお墓を訪ねたとき。三度目は、父が亡くなる前年の秋。酒匂の墓を、すでに建ててあった横浜の弟の墓に合葬することにして、住職と交渉するためにお寺を訪ねたとき。住職の同意を得た足で小田原市役所に向かい、墓地移転の手続きをした。四度目は、墓を移転しないうちに２００５年２月に父が他界したので、その七回忌の直前２０１１年１月に一人で寺を訪ね、予め連絡しておいた、祖父母と父の兄の遺骨を引き取ったとき。この最後の二回の訪問の時に、寺の近隣に住んでいる祖父の弟の息子（父の従弟）にいろいろと世話になり、遺骨を引き取る訪問の際には、その家に挙げてもらっていろいろ昔話をした。これが父の兄弟以外の父方の親族とのはじめての付き合いだ。それ以後季節の便りのやり取りは続いている。

ちなみに父方の祖母・マスの実家も同じ酒匂である。今年他界した叔母（父の妹）の話によると、祖母の実家は商家で、祖父の母親からは「百姓の家に商人の嫁はいらない」といじめられたそうな。もっとも祖父は家業を棄てて役人となって

台湾に赴任していたので問題はなかったのだが。祖母の一族は今も商人で、小田原市浜町に暮らしている。父の従弟が健在だが、残念ながら季節の便り以外には付き合いがないので、これ以上詳しいことはわからない。

父方の親族とは付き合いがなかったと書いたが、一人だけ父の親族で古くから付き合いのある人がいた。父の母親違いの兄。この人の母親は祖父と結婚してお腹に子供もいたのに、祖父の両親がこの結婚を許さなかったために離縁となり、「ふるさと」の小田原市の江之浦に戻った。そこで生まれたのが父の腹違いの兄。この人は蜜柑の仲買い人をしていた。この人の所には三重県から神奈川に戻ってからは毎年夏にかならず遊びに行き、その親戚で漁師をして民宿を営んでいる人の家に泊めてもらって、毎日美味しい魚を食べた。港にさきほど上がったばかりの魚だから、新鮮そのもの。毎年楽しみにしていた。中学と高校の6年間、毎年夏訪れた。

ここは今でも当時とあまり変わらない風景だが、すでに見知った伯父も他界しその家族もここを離れている。

2　関わりの薄い母方の「ふるさと」

母の「ふるさと」は京都市左京区下鴨膳部町。下鴨神社のすぐ北側。京都帝大で工業化学を教えていた祖父が１９２５（大正１４）年に建てた家が現存し、母の上の兄の娘が一人で住んでいる。そして同じ京都には母の上の姉の娘とその家族と母の下の兄の妻とが暮らしている。

１９４８（昭和２３）年に母が小田原に嫁いで以後、母は毎年のように夏には家に帰っていたが、それも１９６１（昭和３６）年の祖母の死までであり、以後は祖父母の年回忌に戻るだけ。しかしこの際には子供たちは一度も連れて行ってもらったこともないので、京都のいとこたちとの私自身の付き合いは薄い。子供のころに何度か母に連れられて京都に行って共に遊んだ記憶があるが、共に遊んだ従兄とほのかに思いを寄せた一歳年長の従姉はすでに他界しており、あとは東京近辺に住んでいる母の姉たちの子供たちがいるが、彼らとは子供時代に多少の交流があっただけで、最近まで付き合いはなかった。

京都の母の実家はまだ現存しているが、母が育った当時とは大きく変わっている。祖父が家を建てた時は４００坪ほどの邸宅で、広い庭に二階建ての和洋折衷の大きな家が建っていた。しかし息子たちの進学の費用にと敷地の半分を売却し、祖母の死後、残った半分を息子２人が分割相続し、家を二つに割って住んだ。その後母の下の兄は家を売って転居し、その家は解体。そして上の兄が住んでいる家も、この代でかなり改装されてしまい、洋館の風情が有った家も、和風に改装されてしまった。私が子供時代にこの家に泊まった時、廊下のあまりの暗さに怖気づいて、トイレに行けなくて祖母に笑われた廊下の暗さは、今もそのままではあるが。

しかしこの京都も、母方の先祖代々の地としての「ふるさ

と」ではない。

京都は、祖父が東京帝大の理学部を卒業したあと、出来たばかりの京都帝大の大学院に進んで以後気に入って住みついてしまった地にすぎず、母方の松本家の先祖代々の地は、福井県越前市。江戸時代は越前府中と呼ばれ、明治以後は武生と呼ばれた地だ。

この地を中心に周辺に２万石の領地をもった本多氏（福井藩の付家老）の家老を務めたのが母方の松本家であった。しかし、明治初年に祖父や祖父の兄が東京に出てきてしまったあとはだれもここには住まず、武生の家も火事で焼けて今は既に存在しない。昨年江戸時代から３５０年以上続いた先祖代々の墓すらその直系の子孫が解体してしまったので、まったくつながりがなくなってしまったのが現状だ。

そしてこの松本家が江戸時代になる前に住んでいたのは、福島県いわき市。いわき城主として、会津の守護大名である黒川城（今の鶴ヶ城）主の芦名家の家老でもあったのだが、主家滅亡のあと宇都宮で浪人していたとき、徳川家康の二男の結城秀康の家老本多富正に拾われた。その後関ヶ原の戦いの戦功で秀康が福井７０万石を領したので、その付家老として家康がつけた本多富正の家老として府中に赴任したのであった。

松本家が徳川氏に仕えるきっかけは、主家芦名氏の滅亡。いわき最期の松本氏当主源兵衛（１５６０～１６３３）が、主家芦名家が宿敵伊達氏との決戦をする際に、後継ぎを失った芦名の当主として源兵衛の意に反して宿敵佐竹氏から養子を迎え、芦名が自分の建策である伊達との連合ではなく佐竹との連合を選んだことへの反発であろうか､合戦を傍観した。ために、この事に不満を持つ他の家老家も数多く戦を傍観したので、主家を滅亡させた。このことへの忸怩たる思いがあったのであろうか、合戦を傍観した家老家の多くがその後伊達に仕えたのにも関わらず、松本源兵衛は浪人して、伝来の地であるいわきも棄てて浪人し、宇都宮に隠居した。その彼の経歴が伝わったのか、家康の二男結城秀康に付け家老として従っていた本多富正に見出され、請われて家臣となり若い主君を陰で支えた（富正１９歳、源兵衛３１歳）。そして関ヶ原の時は宇都宮で伊達を抑える徳川軍の中におり、合戦の戦功で結城秀康が越前福井７０万石を領してこの地に移ると、南の抑えとして越前府中城に付家老本多富正を５万石の領地を与えて置いた。このとき松本源兵衛は家老の一人として４００石を拝領し、主人本多氏とともに、主家松平秀康家を守ることを任務として、その生涯を終えた。

この本多家は寄り合い所帯で、本多富正は本多家嫡流の家の出であるので、三河以来の徳川家家臣と、秀康が結城家を継いでいた時代に本多氏の家臣となった結城時代の家臣、そして秀康と富正が越前を領した後に家臣となった、主として旧豊臣大名の家臣団で成り立っていた。松本氏は結城組の譜代家臣として本多氏を支える立場であった。

そしてさらにいわき松本氏は、清和源氏源満快（みつよし

＝清和源氏初代の源経基の五男）流なので、本来の先祖の本貫の地は、信濃の国・長野県伊那地方。源満快の８世の孫の埴田行光が松本に館を建てたのが始まり。鎌倉時代初めまではこの地に住んでいたのだが、ここもいつしか引き払っていわきに移り住んだので、いわきすら先祖代々の「ふるさと」ではない（松本からいわきに移り住んだ経緯は不明）。

源満快の父の源経基は、経基王と言った時代から地方官として関東に赴任し、有名な平将門の乱の原因を作った人物の一人でもあって、当時は武蔵国の権守（ごんのかみ・国司の二等官）。源満快が生まれた地は、東国なのか都なのかは定かではない。長じた源満快が信濃守となって現地に赴任し土着し、信濃全域に子孫が広がったわけだ。もちろん源満快は清和源氏なので、本来の本貫の地は都の京都ではあるが。

母方の祖母の父・齋藤修一郎（１８５５～１９１０）の生地も松本氏と同じく、越前府中で、本多氏に仕える蘭方眼科医の家に生まれた。だが、齋藤氏が移り住んだのは江戸時代の元禄時代で、大阪で医者をしていたのを本多氏が招いたといわれている。その前の先祖の地はわからない。齋藤という氏は、藤原一族の一つで、平安後期の「つわもの」として著名な藤原利仁将軍が、越前国府に館を持ち、越前国に所領を増やしたのだが、その二男が、賀茂斎宮の長官であったことから「齋藤」と名乗ったのが始まりと言われている。この齋藤という名前自体からは本貫の地は、福井なのだとは思うが、この地とのつながりは不明だ。

武生には今も別家齋藤家という江戸時代の末に分かれた家の子孫はいるが、曽祖父には兄弟はおらず、明治の初めに東京に出てきて、大学南校・開成学校（東大の前身）で学び、留学したボストン大学卒業後は維新の元勲の一人・井上馨の右腕となり外務省や農商務省の官僚として東京で活動していたため、武生には先祖代々の墓が残るのみである。

この母方の先祖の地の一つである越前市には、母もまだ行ったことがなく、私も一度も尋ねてはいない。近々尋ねてみる予定ではあるが。

私は、父方母方とも、その父祖の地としての「ふるさと」とも縁が薄かったのだ。

先祖の地との関わりの始まり

私が父方・母方の歴史に興味を持ち、それぞれの親族と関係を結ぶようになったのは、２００５年の父の死がきっかけである。

父が大腸がんで入院しあと数カ月も持たないと宣告されたとき、父の依頼で父の書斎でもあった応接間の本棚や机を整理したとき、机の引き出しに、父の自伝の原稿を見つけた。このときは父に話すと、俺が死んでからにしろというので読まなかったが、葬儀の前に遺言どおりに読んでみると、祖父母のことから始まって、最近にいたる父の詳しい自伝になっていた。とてもおもしろかったので香典返しにすることにし

て自費出版し、本の題は『よく遊び、よく学べ』とした。自伝の資料の中に昔父が工場の朝礼で話した時の原稿があり、そこにこの言葉が自分のモットーだとあったからだ。

この父の自伝を編集清書の過程で、さらに相続の関係で父の戸籍謄本を小田原からすべて取り寄せたことで、父方の川瀬家の来歴を、父から生前に聞いていた以上に詳しく知ることとなった。

母方の歴史についての関わりはその直後。２００６年１月に、一年前に他界した母の上の兄の一周忌があり、私が母の代理として出席したことで、母の親族たちとの私の直接の関わりが始まった。

築８０年以上経つ古い大きな家にたった一人残されてしまった従妹（兄・姉を先年亡くし、母もこのときひどい認知症でホームに入っていた）があまりに寂しげにしているので、私のほうから声をかけ、以後手紙と電話で連絡を取り合う。その後２００８年の暮れに母の下の兄が他界し、その四十九日の法要が２００９年の２月に京都で開かれた。この法要の後の会食で、居合わせたいとこたちの口から、母方の祖父の父が松本晩翠（１８３２〜８８）と言い、福井県越前市の福井藩家老本多氏の家老であったことと、母方の祖母の父が齋藤修一郎と言い、同じく福井県越前市出身でアメリカに留学して明治の官僚であったことを聞いた。それ以来興味を抱いて二人を詳しく調べていく過程で、母方のいとこたちとも親しく付き合い、さらに祖母の姉や弟妹たちの子孫を訪ねあてて、それぞれの家にどんな資料やエピソードが残っているのかを調べた。またさまざまなところから曽祖父齋藤修一郎に関する資料を探し出して研究し、その成果をその子孫全体に還元する活動を始めたので、母方の親族との関係はかなり濃密なものとなった。

２００９年夏には、母方の松本本家に手紙を出して、曽祖父晩翠の資料が残っていないか問い合わせたところ、晩翠の日記や松本家の歴史を書いた書物『父の思い出その他』『母をかたる』（どちらも祖父松本均の兄の源太郎の長男秀彦の手になる。私家版）と松本源太郎（１８５９〜１９２５：第一高等学校時代の夏目漱石の英語教師、後に山口高等学校校長を務めたあとで学習院女学部長を務めた教育者）の漢詩集が送られてきた。さらに晩翠の日記や源太郎の日記などが本家の当主の従弟のところにあると教えられ、連絡を取り合ったところ、源太郎日記を貸してもらえ、後には晩翠日記などの古い資料や齋藤修一郎の自伝『懐旧談』(大正6年武生郷友会再刊)をも頂戴することとなった。そして彼らの「ふるさと」の越前市の図書館に連絡したところ、図書館に松本秀彦氏が寄贈した松本家文書が多数あることもわかり、その中の晩翠の漢詩集三冊の存在や、武生出身の人たちが作った親睦団体「武生郷友会」の機関誌に、歴史的な文書が多数おさめられていることがわかり、これらをコピーして頂くことができた。

また２０１０年には母の生家にひさしぶりに母を連れて行

き、合わせてこの家に伝わるものを従妹と二人で整理した。この作業を通じて、曽祖父齋藤修一郎が大事にしていた掛け軸一本と松本家伝来の掛け軸数本を見つけた。
この松本と齋藤の一族との関係は、私が曽祖父たちのことを調べる過程でかなり深いつながりとなり、合わせて彼らに関係する資料のありかを求めて、越前市の図書館や教育委員会の人とも連絡を取り合っているので、今初めて、母方のふるさとの一つである越前市との関わりが深まりつつあるのが現状だ。

「漂泊の民」としての私が考える「ふるさと」とは

こうやって我が一族の歴史を見ていくと、我が家はかなり早い時期から転勤族であり、「ふるさと」を持たない「漂泊の民（母方は民ではなく支配階級であるが）」であったことがわかる。
母方は平安時代から続く武士の家であったために、当時から任地を転々と移り住む暮らしであったのであろう。辿れるだけでもこの１０００年間に、京都→信州伊奈地方→信州松本→陸奥いわき→越前府中→東京→京都と移転している。
考えてみれば母方の祖父・松本均は、めぐりめぐって父祖の地である京都に戻ったわけだ。
祖父が京都を気にいったのは、生まれ故郷の武生（越前府中の明治以後の名）に京都がとても似ていたからだそうな。そういえば武生は越前の小京都と言われた町で、室町時代以後は越前国府が置かれた政治と商工業の町であり、町の東を日野川という川が流れ、周囲を山に囲まれた盆地である。京都は日本の首都であり、政治と商工業の町。そして町の東を賀茂川が流れ、周囲を山に囲まれた盆地である。一度行って祖父や曽祖父らが歩いたところを見てみたいものだ。
父方は元々小田原市酒匂に長く定住した水呑百姓であったが、祖父・川瀬泰重の段階で「ふるさと」酒匂を棄てて都市住民となり、祖父は台湾総督府の役人となり台湾省内をあちこち転勤した。父は大手電機メーカーの役員となったので、こちらも転勤族である。母方は江戸時代以前から都市住民であちこち「転勤」していたわけであったが、明治で「ふるさと」を棄てて東京に出て、曽祖父は官僚、祖父は大学教員となってそれぞれの新たな地で生活を営み、その子供もみな全国に散って、それぞれの地で生きている。
私の比較的近い先祖たちの歴史を振り返ってみても、彼らもまた「ふるさと」を離れて、新たな地での生活を一から作り上げ、そこを新たな「ふるさと」とした人々であったことがわかる。
父方の祖父・川瀬泰重は、退職し戦争で引き上げてきてからは、「ふるさと」に戻ろうとした。結局戻るところがなくて「ふるさと」の近所に住んだわけだが、もし太平洋戦争で日本が負けて台湾が独立することがなかったら、はたして「ふるさと」にもどっただろうか。父の残した自伝『よく遊び、

よく学べ』によると、父が戦後戻るまで小田原を訪れたのは、祖父に連れられたたった一度の旅のときだけだったという。

父・泰久も叔父の畑を分けるという申し出を断って、会社員として他の場所で終生生きた。

母方の祖父・松本均も、高等学校に進むために「ふるさと」武生を出て東京に移って以後、父祖の法事などで武生に戻ることはあってもそこに住むことはなく、仕事で住むこととなった京都に墓を建て（もっともこの墓は早逝した三女のためのもの。娘が眠るこの墓に入りたいとの思いで自分もここに入れろといったのだろう）、子供たちはほとんど武生につれていってもらってないという。

この祖父が三女のために建てて自分も入った墓は、天寧寺という古い寺にある。この寺の来歴を調べると、なんとこれは、松本氏の主君であった芦名氏の氏寺で、元は会津若松の黒川城の麓にあったもの。この寺の住職が芦名氏滅亡に際して、御本尊を担いで京都に逃げ、縁を頼って再建したのが京都の天寧寺。その後この寺は会津を領した上杉氏の家老の直江兼続の支援で会津若松に再建されたが、住職の弟子の一人が京都に残って京都天寧寺を守ることに。なんと祖父は、先祖が滅ぼしてしまった主家の菩提寺に墓を建てたことになる。一方伊達に敗れて実家の佐竹に戻った芦名の最期の当主は、その後江戸幕府開創後に佐竹氏が秋田に転封となるとともに秋田に移住し、のちに角館城主となり、そこに天寧寺を再建した。これが、天寧寺と名乗る寺が全国に三つある理由であるが、人の一生というのは面白いめぐりあわせの連続だと感じさせるエピソードだ。

母方の祖母の父・齋藤修一郎も、１８７０（明治３）年に学業のために沼津に移り住み、以後東京・ボストンと学び、帰国後は維新の元勲の一人・井上馨の右腕の官僚として主に東京で暮らしたのだが、「ふるさと」武生に戻ったのは、ボストンに行く前の一度と、帰国後１０年して、自分の父の三十三回忌法要を「ふるさと」で営むことと、合わせて当時井上が進めていた自治党結党のオルグを兼ねて福井を訪ねたのが二度目。このとき武生にあった生家を寺として貸出、残っていた家財や書物をすべて東京に持って来たようだ。そしてその直後に東京青山の自宅の裏の寺・長谷寺（ちょうこくじ）に墓所を求め、以後は数回武生に戻っただけであったようだ。多額の借金のために零落した彼は、最期を麻布の小さな借家で迎え、西麻布の長谷寺の墓に葬られた。

母方の祖父の父・松本晩翠だけは、江戸時代２５０年間の伝統を守ったのか、武生で１８８８（明治２１）年に死去。藩政時代に二度江戸に殿の代理で江戸城に登城するために江戸に出たことと、禁門の変の際に京都警備を仰せつけられて数カ月京都に滞在、さらに幕府のおこした第二次長州戦争の際にしばらく大阪に駐在。そして戊辰戦争に越前藩の大隊長として越前府中本多家の家臣団を率いて北陸戦線を転戦した以外には武生を出ることはなかった。彼は若いころには福井藩が洋式軍隊に編成を変えるに際して府中の軍政改革の責任

者になって洋式軍隊の編成に奔走し、壮年には多くの戦に従軍しながらも府中の「藩校」である立教館の学事総裁ともなって後進の育成に努めた。晩年、１８６９（明治２）年の版籍奉還に際して、主家本多家を福井の松平家が大名並の事実上の独立藩だと新政府に申請せず府中領を乗っ取ってしまった際には、主家の地位回復運動の総裁に就任した。しかし、この際に起きてしまった旧領民たちの暴動（武生騒動、１８７０年８月）の扇動責任者とされて福井の獄につながれる。許されたのちは、主家を華族にするべく奔走。この仕事を果たしたのちは、福井県の郡長として新政府に出仕するという波乱の人生を送った人だ。彼は、死の前年に長男源太郎が住む東京を訪ね、東京や日光などの観光を行うとともに、東京に移り住んでいた親族らを訪ねたのが、晩翠の最期の旅であった。近いところの先祖では、この晩翠だけが、越前府中松本家の父祖の地である武生に終生住み続けた人物であった。

　しかし、これも考えてみれば、漂泊の人生の中での任地に骨を埋めたという見方もできる。

　これら私の父祖たちの生き方こそ、私の生き方そのものにしたいと思う。「ふるさと」はなくとも、仕事などで移り住んだ地でベストを尽くし、そこに骨を埋めるというものに。

　父方で見てもすでに「ふるさと」を棄ての都市生活は私で三世代目。母方でも明治以後に限っても、松本家なら私で三世代目、齋藤家なら私で四世代目。自分自身も、親や祖父母の世代の「ふるさと」からも切り離されて長い間生活している。私自身は生まれながらの「漂泊の民」なのだ。

　こういう生活実感からすると、「ふるさと」を失ったことの悲しみに明け暮れている人の感覚は、私には頭で理解はできても、真実肌身に感じてわかるものではない。

　日本には古から「至る所に青山あり」という言葉がある。青山（せいざん）とは墳墓の地ということであり、骨をうずめる場所、本来は先祖代々骨をうずめて来た故郷（ふるさと）と同義語であったと思う。この日本で古から、骨をうずめる場所は先祖代々の場所ではなく、全国至るところにあるという思想が流れていたのは、中下級の貴族階級や武士階級という古からの転勤族の中においてであったであろう。土地を基盤として生きる、百姓にはなかった思想だと思う。

　この「至るところに青山あり」という言葉とかなり近い言葉として、「住めば都」という言葉もある。

　これも本来は、都を遠く離れた異国の地に赴任しなくてはならなかった中下級の貴族や武家に伝えられた言葉であったと思われる。転勤族にとっては、先祖伝来の土地と言うこだわりを持っていても意味がない。次々と転勤した先をあらたな「ふるさと」「青山」として、そこに骨を埋める覚悟を持って励むというのが、その生来の生き方であったのだと思う。

　末端の支配階級である武士の歴史では、「ふるさと」を離れて「転勤」することは、彼らの発生の時代である平安時代から江戸時代の初めまで常にあったことだ。

平安時代には地方の国府に勤務する武官として移住した武門貴族たちとその郎党たちが。そして次には、鎌倉幕府の成立に伴い、関東御家人となった武門貴族の子孫や土着の武士の末裔が、全国に地頭や守護として。さらに南北朝時代や室町時代に、勢力を広げた守護大名の家臣が、守護代や奉行として。武士はその発生以来全国に移住し続けた。そして最後に、信長・秀吉・家康の天下統一とこれに伴う大名の転封。多くの大名とその家臣団が、長く住み続けた本貫の地を離れ、遠い異国に移住した。しかし大名家の転封や取りつぶしは五代将軍綱吉の時代までなので、１８世紀初頭以後の１５０年ほどの期間には、多くの武士が、長くひとところに定住して、そこを「ふるさと」にする時代が続いた。武士にも「ふるさと」が生まれた時代が江戸時代なのだ。

特に今回大地震と大津波、そして原発事故が襲った青森県・岩手県・宮城県・福島県の太平洋側は、弘前藩津軽氏・盛岡藩南部氏・仙台藩伊達氏・相馬藩相馬氏・三春藩秋田氏など外様の大藩が多い土地で、多くの武士が江戸時代どころか鎌倉時代以来この地を本貫の地としていた例が多いという特殊な地域である（日本海側でも江戸時代初期に常陸国・茨城県から転封された秋田藩佐竹氏や同じく陸奥国南部・福島県から転封された米沢藩上杉氏がある）。そしてその南側にこれら外様大藩の抑えとして会津藩松平氏など徳川氏親藩の大藩や譜代の大藩が江戸初期以来置かれているので、この地の武士たちも１５０年ほどの間、この地を本貫とした。つまり東北地方は民と武士の多くがこの地を長く「ふるさと」とした特殊な土地なのだ。

これが大きく変化したのが明治維新で、戦に勝った薩摩・長州・土佐・肥前などの諸藩では、下級藩士にいたるまで多くの者が東京に移住して新政府の役人となった。そして負けた幕府と最後まで幕府方についた諸藩は転封や減封となったので、多くの武士が「ふるさと」を棄てて新たな地に移動せざるをえなくなった。さらに廃藩置県に伴って藩の上級役人になっていたものたちの多くは、藩が県となって中央政府の管轄下に置かれたため、中央から派遣された官吏として他の県に転勤することとなった。下級役人となった下級武士の多くは「ふるさと」に残ることとなったのだが。その後俸禄の廃止で家禄を失った武士は新たな仕事に就くとともに、仕事を求めて全国に散った。武士の世界にも、明治維新とともに「ふるさと」を失う、流浪の時代が再び始まったのだ。

しかし民のレベルでは、「ふるさと」を失うということは、歴史上たびたびあったわけではない。

民のレベルで大移動があったのは、第一に江戸初期の大規模な新田開発期。この際に各藩は、他藩の領民の二男や三男でも、土地を求めて移住したものには手厚い保護を与えたので、多数の民が新天地を求めて移住した。こうして民のレベルで大規模の移動、「ふるさと」を棄てて新たな「ふるさと」をつくる動きが初めて起きたのだ。しかしこの動きはこの時だけで、やがて社会が安定するとともに、新田開発で移り住

んだ地がかれらの「ふるさと」となり何世代も暮らしを続けて行ったのだ。

注

江戸時代初期の新田開発を巡る百姓の大移動については、宮崎克則著『逃げる百姓、追う大名―江戸の農民獲得合戦』（２００２年中公新書）が詳しい。

これに変化が生じたのが、江戸時代中期以後に相次いだ飢饉。飢饉のたびに食えなくなった中下層の百姓家族が、食と職を求めて都市に流れ込む。こうしてその日暮らしの「ふるさと」を失った都市貧民が生まれた。

さらに明治維新とともに、新たな仕事を求めて都会にでる動きが少し起きたが、工業化が進んでいないこの時代には、民のレベルにおける移動は、まだまだ少ないものであった。これが大規模化したのは、大正時代に全国に工業地帯が次々と誕生するようになってから。そしてこの民のレベルでの大移動が巨大な規模で全国化したのは、第二次世界大戦以後、それも１９６０年代以後の高度成長時代のこと。このころから村の二男・三男や女子は、次々と仕事を求めて大都会に移住し、そこで伴侶を得て家庭を築いた。

この大正から昭和にかけての工業化の時代が、民のレベルで大規模な「ふるさと」喪失が起きた時期だ。しかしこの時期においても、家を継いだ長男達にとっては、先祖代々の地が同時に自らの生まれ育った地としての「ふるさと」であり続けた。

いわば「ふるさと」は、江戸時代の新田開発の時期やうち続く飢饉の時期、そして大正時代からの工業化社会の進展以後は、この地で養いきれない人々を大量に他の地に押し出し吐き出して、自らを維持してきたと言っても過言ではない。飢饉や破産などの理由で「ふるさと」を捨てざるを得なかった人々にとっては、「ふるさと」とは懐かしんでもけっして戻れない地。だから「遠きにありて思うもの」なのだ。でも職を求めて「ふるさと」を出て来た世代でも、その親がまだ健在であれば盆暮れには訪れることもあるだろうが、代が変われば次第に疎遠となり、都市に移住したその子や孫の代になればさらに疎遠となる。都市に排出された大多数の人にとっても、「ふるさと」は「遠きにありて思うもの」に時を経るとともになっていったのだ。

今回の東日本大震災と福島の原発事故によって起きた大規模な「ふるさと」喪失は、都市に排出されることなく「ふるさと」に留まれた人々が、人災とも言える大規模災害によって、本人の意思に反して突然に理不尽にも、「ふるさと」を破壊され、「ふるさと」の地から引きはがされたものだ。また高度経済成長期に「ふるさと」を離れた人々も、その高度経済成長が地方にまで及ぶことで、「ふるさと」の景観が、都市化や過疎による廃村などによって次々と失われる事態に直面している。

この意味で、私たちは今、未曾有の巨大な規模での「ふるさと」喪失の体験をしているのであろう。「ふるさと」を失ったことへの悲しみが社会に蔓延していることは、この意味で当然と言える。

都市住民の間に「ふるさと」を失ったことへの悲しみが充満していることを背景として、原発事故をなかったこととし、合わせて巨大地震津波を防げなかったことの責任や復興のための大規模な援助も回避する意図を持った政府が、「ふるさと」との絆を守れとの大キャンペーンを張った。ために、「ふるさと」喪失感が、社会を覆ってしまい、人災とも言える出来事の責任を追及する動きが阻害されているのだと思う。

しかし「ふるさと」に関わる歴史をほんの少し紐解いたことでもすぐわかることだが、何もこれは日本の歴史上はじめての出来事ではなく、さまざまな時代において、多くの人がさまざまな理由で「ふるさと」を失い、新たな地で新たな仕事を得て暮らし、そこを新たな「ふるさと」としてきたことが見出される。歴史を振り返ってみて、失われた「ふるさと」にこだわることは意味のないことだとわかるわけだ。

まとめ

戦後の高度経済成長の時代を経て、百姓を辞めて転勤族となってしまった人が多数を占める現在の日本において、「ふるさと」との絆を求める言辞は、すでに空虚であると思う。そして東日本大震災と原発事故による放射能災害によって「ふるさと」を奪われた人にとっても、「ふるさと」との絆を求める言辞は、けっして手に入らない、失われた麗しい過去へのこだわりを強め、「ふるさと」を奪われた現実から目をそむけ、「ふるさと」を消滅させた責任を追及することも忘れて、ただ感傷に浸る毎日を強制されることにつながると思う。震災と原発事故からすでに三年半の月日が経った今日においては、「ふるさと」を失った悲しみに浸っているのではなく、それぞれが、あらたな地で「ふるさと」をあらたに作り上げる事業に取り組むとともに、人災の責任を厳しく問いただすべき時期に来ているのだと思う。

そして高度成長期終焉からすでに４０年余の月日がたった今日、都会に出て働いているうちに「ふるさと」を失った人々は、そのことを悲しむのではなく、新たな地での自分の人生の総括をするとともに、破壊された「ふるさと」をどうやったら再建できるのか、そのことに都市にいる自分がどう寄与できるかを考えるべき時ではないだろうか。

人はそろそろ「ふるさと」にこだわらずに、今住んでいる、もしくは今活動している場の人々とのつながりをこそ、もっとも大事にするべき時期にきているのではないだろうか。そして人生の黄昏を迎えたときには、自分の人生の歩みをしっかりと振り返って再評価し、これを人生の後輩たちにのこす作業に専念すべきだろう。残された自分の人生をより有意義に過ごすためにも。

わたしの現在と課題

春田さんの文や詩を読んでいて、自分の持つ感覚との違いからくる違和感があった。その違和感を、東日本大震災と原発事故による放射能災害以来喧伝されている「ふるさと」とのきずなを深めようとの大合唱への違和感と結び付けて、自分史や我が家の歴史、そして日本の歴史を紐解いて突き詰めていった結果が、この文章である。

「ふるさと」を失うということについての考察の最後に、考察のまとめを踏まえて、私の人生の総括のためのたき台として、私の現在の課題について記して、少々長くなったこの文章を終えることとしたい。

私は今現在、今年で８９歳になった母を介護しながら、四つの研究課題に取り組む日々である。

一つは民族主義団体が編集した『新しい歴史教科書』の歴史認識が如何に間違っているかということを、古代から現代まで徹底検証する作業。これは私の個人サイト「学校を変えよう」(http://www4.plala.or.jp/kawa-k)に順次掲載するとともに、同時代社から、『徹底検証「新しい歴史教科書」』シリーズ（全５巻１０分冊）として２００６年から順次刊行され、すでに４冊、近世編の中までは刊行されている。

二つ目は、母方の曽祖父である齋藤修一郎の研究。彼は明治最初の文部省官費留学生としてアメリカのボストン大学法科を卒業した後は帰国して、外務省や農商務省官僚として活動した人物だが、極めて早い時期に日米戦争の危機を感じて、日本は植民地を持つべきではなく、アメリカのように技術革新を進め自由貿易主義でアメリカと手を携えて進むべきだという考えを公言していた人物だ。しかしその死後は彼の業績や言説は忘れ去られ、わずかに、彼がアメリカ留学中にイギリス人の小説家エドワード・グリーと共に英訳した忠臣蔵、『The Loyal Ronins』(忠義浪人)（**G. P. Putnam's Sons. New York, 1880**）を読んだアメリカ大統領のセオドア・ルーズベルトが日露講和に動いたという逸話によってのみ知られている。この彼の生前の主張は、私自身が日本近代史を総括してもった考え方と同じであったので、なぜ彼がこのような考えに到達したのかを明らかにしたいと思って、彼の活動の跡を辿っている。いずれこれは評伝として公刊したいものだが、この研究過程の諸論文も、前記の個人サイトに掲載してある。

三つ目は、マルクス主義の間違いについての研究。私は国学院大学史学科を１９７３年に卒業した後、公立中学校教員を長く務めてきたが、その途中から政治活動にも入っていた。日教組左派のさらに左に位置する独立左派の活動家として。マルクス主義との出会いは大学時代に、大学法をめぐって全学ストをするかしないかで、自治会執行部の学生と対立し、彼らの思想的背景であるマルクス主義とやらを知っておいて彼らを論破してやろうという動機から、マルクス・エンゲル

スの著作を読みだしたのだが、逆にはまってしまったことに始まる。しかしどの党派も彼らの思想を正しく継承していないと思ったので入らなかったのだが、高校時代の学園闘争を経てある新左翼の一派に入って活動していた弟に、１９７４年の戸村選挙（三里塚空港反対同盟の委員長戸村氏が参議院議員選挙に立候補して、支援する新左翼諸党派が支えたもの）の時にオルグされ、弟の入っていた組織の活動の在り方に共感して、自分自身も活動家となった。もっとも入ってみてこの党派のマルクス理解も他の党派と同様に間違ったものだと感じたので少し距離を置いて見ていたのだが。その後紆余曲折があってこの党派は解体され、今はその中核的部分の活動家がわずかに残って小さな研究サークルとして活動している。私自身もその中にいるが、学生時代から感じていた、左翼のマルクス理解の間違いについて、ようやくこの小グループでも話題になってきているので、これを研究テーマにするべく自分自身も学ぶとともに、仲間に働きかけているところ。

　マルクス理解の間違いとは、要するに、マルクス自身が『共産党宣言』で、資本主義から社会主義への移行は、暴力革命によってプロレタリアートの独裁政権をつくることによってしか成し遂げられないとしていたものを、実際の１８４８年革命が彼の予想であるヨーロッパ社会主義革命にならなかった事実を基盤に歴史を再考察した結果として否定した。このことは後年の著作『ゴータ綱領批判で』、連続した民主主義的改革によって社会における自治を拡大し、資本主義社会の中に、社会主義的経済組織を拡大していくことによってなされると、自身のテーゼの変更を明確にしている。しかしマルクスの弟子たちは、この事実に気が付いていなかった（もしくは無視した）ということ。

　四つ目は以上のこととはほとんど無関係な、平家琵琶の教習とその研究。

　今無関係と書いてしまったが、この出会いは、天皇制とは何かということを研究する過程で、天皇制の性格を如実に示した物語が平家物語であることに気がついて数年間研究した。その後これは琵琶を伴奏にした語りものとして流布したものであることに思いいたって、今でも伝承者がいることに気づいて語りを聞きに行き、そこではまってしまって入門したもの。稽古と研究に励んですでに１０年の歳月を刻んでいる。

　こんなことをしながら６４歳となった今年、いろいろな出会いの中で、自分自身の人生の在り方を回顧する機会が次々と生まれ、今は上記の四つの研究活動を進める傍ら、こうして自分の人生そのものを振り返る作業を進めているところだ。

　私が今、付き合っている仲間は、まず大学時代の友人たち、そして次は、卒業して赴任した中学校の仲間たち。ただこの友人たちとの日常的な交流は薄く、時々同窓会的にあつまるだけ。したがって、もっとも濃い関係を持っている友人知人は、退職後に付き合うことになった、平家琵琶の師匠と相弟子と関係者、そして父祖たちを調べる中で知り合った歴史学

界の仲間、さらに大学卒業後に一緒に活動した政治活動の仲間たち。これは、私の人生にとって、「ふるさと」が問題ではなくて、その時々の活動の場と、そこで出会った仲間たちとの関係こそが最も大事であった証拠である。

先祖の一人である母方の曽祖父齋藤修一郎にこだわりその研究にいそしんでいるのは、「ふるさと」とのこだわりではなく、彼が、私自身が考えて来たように、近代日本の間違いは、植民地を持ったことだという考えを、明治の時代において早くも持ち、植民地を放棄して進むべきことを公言していたことに興味を覚えているから。「新しい歴史教科書」の徹底検証は、近代日本の進路の間違いはどこにあったのかを探求しようという、学生時代以来の私自身の関心の終着点。さらにマルクス主義の間違い、左翼のマルクス認識の間違いを明らかにする作業も、これと密接につながり、学生時代以来の、この国の在り方を変えなければとの思いの継承でもある。そして平家琵琶。以上の問題意識と密接なものとして、日本歴史の根幹をなす天皇という存在。この存在の意味を解き明かそうとする作業との関わりで、天皇制の魔術で人々をつなぎとめる装置の一つであった平家琵琶に出会い、元々音楽大好き人間として宗教音楽が好きな私は、平家琵琶は音楽としてもとても面白いと感じて、この伝統を残そうとしている。

あと一つやっておかなければいけないことは、自分が教師として活動した２９年間の総括だ。国家に役立つ人材をつくる学校ではなく、一人ひとりの生徒を大事にし、この子らを主人公にした学校が作れないのか。この思いでとりくんだ２９年間。その活動の成果は、これも私の個人サイトにすべて掲載してあるが、この評価の作業が残っている。これも上記の四つの研究テーマに取り組みながら、やっていくこととなるだろう。

さらに書きたい評伝としては他にも、松本晩翠伝・松本均伝、そして弟・川瀬誠治の評伝も書いておきたい。弟は労働運動をやっている中で日雇い労働者の問題に出会い、横浜の寿町に入って自ら日雇い労働者となり、その解放を模索する中、事故にあい、１９８４（昭和５９）年８月に３２歳で他界した。その未完の想いと時代との格闘を描いておきたい。

（２０１４年９月１６日　記す）